発　行　所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2－4－1
丸ノ内ビルディング６１７号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（3212）4007・1480
Fax（3212）1447
編集責任者　岡　沢　憲　芙
印刷所　関東図書株式会社
定価300円（年間購読料四千円）
1994年5月25日発行
No.286 第26巻5号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

No.286　Bulletin Vol. 26　No. 5

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi－Bldg.,No.617Marunouchi,Chiyoda－ku,Tokyo,Japan.

子どものためのオンブズマン

Sweden's Ombudsman for Childeren

理　事　　潮見　憲三郎
Director, Mr. kenzaburo Shiomi

スウェーデンで、公職としての「子どものためのオンブズマン Barnombudsmannen」制度が昨年7月に発足した。保健社会省の所管に属する特別の組織で、初代BOはMs. Louise Sylwander。スタッフは十四名。評議員十二名がBOをサポートする。

ここでいう「子ども」とは18歳未満。根拠法は1993年「子どもオンブズマン設置法」。

「BOは、幼児・青少年の権利と利益にかかわることがら一般を監視する役割を担う。とりわけ国連の「子どもの権利条約」を遵守するスウェーデンの義務にかんがみ、国内の諸々の法令規則とその執行のしかたが同条約に違反しないよう目を光らせ、遵守を保障するのはBOの任務である」（設置法・第1条）。

①国連の条約が定める子どもたちの権利と利益を守る。その権利と利益のことを子どもたちに周知させ、自覚させる。とくに障害児の権利にBOは目を配る。

②「子どもの目で見た」問題意識や発育・成長途上の子どもたち「声」を、社会の色々な組織や活動に反映させる。「子どもからのホットライン（無料電話）」制は、その一助。

③個別の案件についての子どもの救済はBOの本来の役割ではない。BOの本領は全般的な見地からの子どもたちの権利の確保と、そのための政策の推進にある。

④子どもの権利・利益にかかわる緊急な問題に対する社会的関心と世論を喚起し、そこに議会や政府や各種団体などの目を向けさせる。

⑤NGOの諸活動や議会・政府機関と協力する。

このようなは、公職者としてのOBの活動は最近の国連の動きに対応するが「子どもオンブズマン」という発想そのもののスウェーデンでの起源は古い。60年代、70年代にかけて「子どもの安全と事故防止は子どもの権利・大人の義務」「社会福祉や教育は進んだが子どもの権利の保障は立ち遅れている」という認識で、世論が高まり市民運動が盛んになり、数多くの法律も作られた。

民間団体Rädda. Barnen（子どもを救おう・連盟）では1973年に「子どものためのオンブズマン」BO職を設けた。公職の、いわば先駆けだ。たとえ親であっても子どもに暴力をふるってはならないという「家庭内体罰禁止法」の制定は当時Newsweek誌のニュース種となった誌（1979）。

子どものための民間オンブズマン職は西ドイツにも例があった。法律にもとづく公職としての制度化でスウェーデンより早かったのはノルウェーで、1981年のことだった。

目　　次

子どものためのオンブズマン
……潮見　憲三郎……1
ドリスとわたしたちの期待
……中山　庸子……2
Current Sweden 目次（15）……4

わが国でも、今年は3月に国会が「子どもの権利条約」の批准承認案を可決した。法務省は、現行の「人権擁護委員」制度を活用して、全国約1万3千人の委員のなかから600人程度の「子どもの人権オンブズマン」を任命したいという意欲を示しているという。その一方で、政府は、条約批准に伴う国内法改正などの必要はないという。対応がチグハグではないか。学校での体罰、いじめ、「日の丸、君が代」問題、家庭での幼児虐待など…問題は山積しているはずだ。

ドリスとわたしたちの期待

Doris and our dreams

スウェーデン語講師　中山庸子
Ms.Yoko Nakayama

この3月、13年ぶりにスウェーデンを訪れてストックホルムには約3週間滞在した。女性事情に関する最新情報の収集が目的の旅であったがさいわい、だれかに導かれるようにして多くの人に会い、そのネットワークからつぎつぎと必要な人に出会うことができた。

フェミニスト・フェスティバル1994では、発展途上国の人口問題などに関わってサンビアに行ってきたRESUカタリーナ・リンダルの話、そして雑誌「バン」編集長ペトラ・ウルマンとフレドリカ・ブレーマー協会アン・ファルキンゲルの男女の生物学的差異の意義に関する対話、それに既成政党の女性議員たちや経済学者アグネータ・スタルク、そして革命的フェミニスト、レスビアンを自称する若い政党員らが展開する、女性党の是非など女性のための政治戦略を語る討論はじつにおもしろかった。

ストックホルム大学社会学系学生組織JUSEK主催の「女性とキャリア」などをテーマとする講義も聴いた。また1943・1988・1993年を軸に「3世代の女達」を描いたパネル展。男女平等オムブツマン事務所やFRN（研究助言委員会）ではこれまでの調査報告書をたくさん入手。男性役割を問題にして専門的なアドバイスをしている男性の講義を聴いたり、町のレストランで3歳の娘と二人で昼食を食べている隣のテーブルに座った若いパパに話しかけてみたり。

友人の紹介で「ぼくがこのケーキ作ったんですよ」とだされたケーキを食べながら「掃除機をかけるのはぼくの当番」というトシュテン&カーリンの平等ハッピー・カップルの自宅で話をしたり。

テレビのモーニングショーや新聞に読み取れる女性状況は、湯気がでてくる新鮮さ…。

友人アネッテの判断で3月23日のJA協会の年次総会には、ゲストとして参加させてもらった。1987年に設立されたJA協会は、男女平等のためにさまざまなかたちで働いている人たちの協会だ。たとえば会員のひとりアネッテは企業に女性の活用法をアドバイスすることを主な仕事としている。

会場はSRスウェーデン放送のホール。入り口で歓迎の握手を受け、JAがどういう組織なのかよくわからないままに会場に入る。OHPを映し出す大きなスクリーンやテレビ、演台、そして事務局のテーブルが舞台装置だ。フロアは20位ある小さなテーブルを3・4人で囲んでくつろげる雰囲気。3割ぐらいが男性だ。

役員選出など事務的な話し合いが続いたあと、男女平等のための仕事をするプロを育てる20単位のコースをつくったことが紹介される。ストックホルム大学で認められたコースとなるが、これはJAのなかのプロジェクト・チームがつくりあげたものである。JAにはほかにも、自分達が書く文書の中で、たとえば「人」を主語としたいとき、本来「男性」だけを意味するmanを不用意にもちいていないかなどチェックしていいまわしを変える「ことば監視」グループとか、議会に提出される議案を対象に男女平等の目を光らすグループ、あるいは教育、教会、EG、労働価値査定、研究、会議開催などテーマごとに、12のグループが活動している。なかには古い価値観にとらわれない個性や出来事を見つけて評価しようと監視しているグループのある。深刻ぶらなくて明るい、その余裕がうれしい。

仲間の仕事を報告し終わるたびに、事務局の

テーブルの上にさっきまで飾ってあった鉢植えの花をその責任者にプレゼントして讃えるのはおもしろいと思った。

今年度のドリス奨学金受賞者は、この分野の古い論客で、2週間まえ国際女性デーの8日、ダーゲンス・ニューヘーテル紙にも記事を載せて話題を呼んでいたエバ・モーベリであった。(あとでエバさんとことばを交わしたが、「日本では男達が死ぬほどがむしゃらに働いているでしょ、労働時間短縮が日本の男女平等のために大切なことでは？」とのこと。)

そして今年度のニュース賞はユニークな切手意匠を考え出してビジネスを成功させた女性起業家を取材したSR「ラポート」のテレビ制作者アンナ・ヘミングが授賞した。授賞式という晴れやかな場面が展開する。よく見ると賞を授与しているのは新聞・テレビで見慣れた顔、男女平等担当大臣のベングト・ヴェストベリ！ 座っている席の「重さ」がやっとわかる。しかし、それにしてはどの顔もなんと自然で軽やかなこと。

彼はパパ・モナドを提唱していて、「子どもがうまれたら父親も最低一カ月は休暇をとって、子どもの成長につきあってほしい。その経験はその男性の人生に大きなプラスになり、子どもも自分にはっきりと愛情を示してくれる父親と信頼関係の基礎を築くことになる」。

これは両親休暇の考えをさらに徹底させた法案である。この法案は6月1日、議会を通ったので、父親休暇で乳母車をひく男性の姿がまちに増えることだろう。男女共通の体験が増えればさらに、たがいに理解し合うためのベースができ、幸福感を増す助けになろう。

JAの会長、イングマリ・ペーションが93年度活動報告のなかで、こう書いている。「JA役員のなかには、男性性と女性性を統合した新しいタイプの男女がいる。つまり、やさしく人の世話をするという女性にとって伝統的な側面と、行動力をみせる新しい側面をうまく一体化させた女性がいるし、また一方、行動力を示すという男性にとって伝統的な面と、やさしく人の世話をするという新しい面をじょうずに一体化させた男性もいる。こうした男女はこれまでいつでもいたが、もっと必要だ」「かつての大きな国家が小さないくつかの国に分解する例を世界に見てきたが、同時に、統合に向かうエネルギーも存在している。わたしたちには自分のこころのうちをバランスよく保つために、そして、ひとりひとりが自己の女性的な側面と男性的な側面を統合するために、今後さらに、外部的には分裂した現実を経験する必要があるのかもしれない」

休憩時間にコーヒーと手作りの菓子パンをいただく。ひとりの女性が話しかけてくる。リリアンだ。30年前に日本に行ったことがあるという。ここでの会議中、議長が発言者を名指しするときいつもファースト・ネームだったので覚えていた。日本でも「ムツコ、どう？」「モトコ、次発言どうぞ」。こんな会議、やってみたい。「立場」からの発言でなく、ついほんとうのことしかいわなくなってくるに違いない。話が早くていいではないか。

会議がおわってから、夕食。残っていたのは事務局など、会に深く関わっている人ばかりらしいのは席に着いてみて気がついた。それでもハズレ役ついでに、にこやかな顔していっしょに乾杯する。右隣は教育グループの長でもあり、役員をしているヨーラン。男性性と女性性の本質とその数百年後のゆくえについてわたしと考えが同じなのでうれしくなり、つい食事のあいだじゅう、夢中でおしゃべりした。

ヨーランは自分で開発したという男性性・女性性のモデル図をふたつの軸の上で描いた。「この図はあなたの専売特許ですね」というと、「いや、どうぞ自由に使ってください」という。

スウェーデンでは歴史的に、女性のかかえる問題について、男性でも、これは人間全体の問題であるという視点がもてたカール・ヨナス・ラブ・アルムクビストのような人物がいた。現代でもそうした男性達がいて、いっしょに運動が進められているようである。

事務局長ドリスの好意で、数日後、彼女の自宅に招かれた。会計担当のソルヴェイといっしょに昼食をごちそうになった。ドリスの書斎がJA本部になっていて、いくつも電話器がある。JAの機関誌や研究報告書など資料をいただいた。

台所は身障者用に改造されていて、流しの上の食器棚がボタン一つで静かに降りてくる。足の弱ったドリスに必要な、階段を上下する装置に勧められてわたしも乗ってみる。地下の応接間は博物

館のようで、数年前亡くなった夫とともにこれまでいかに積極的に生きてきたかがよくわかる。夫の仕事部屋は触れずにいまもそのままにしているというドリスの横顔はさびしそうだったが…。

さまざまな社会問題を男女平等の視点から研究し、コメントし、変革を願い続ける、JAのような運動体があるからこそ、差別に苦しむ世界の女性達から、「スウェーデンで起こっていることはわたしたちの誇りでもあり希望そのものです」という声がでてくるのである。

そのスウェーデン女性も経済的な圧迫で、不本意なできごとに悩んでいることが今回の訪問でよくわかったのであるが…。全国に同じように男女平等を大切なことと考える人たちがいる。その一つの中枢となっているドリスの家を出たときはもう薄暗く、オレンジ色の夕焼けは時間のない世界の姿であった。

The Swedish Institute 発行 Current Swedenの目次一覧（15）

スウェーデンの政治、経済、文化などあらゆる方面のトピックを速報するThe Swedish Institute 発行のCurrent Sweden最新号の目次をご紹介いたします。（Vol.25, No.2 につづく）。

内容についてのご照会には、当研究所も可能な限りお答えいたします。（事務局）

No	Date	Title
No.394	January 1933	The Swedsih Welfare State at the Crossroad by : E. Huber , J. D Stephens
No.395	January 1993	Sweden, Baltic co－operation and regional Europe. by : C－E. Stalvant
No.396	February 1993	The Swedish Debate on Sexual Offences Against Children. by : L. Eklund
No.397	March 1993	The Sami, Indigenous People of the North. by R. Eronn
No.398	March 1993	Private and Public Companies－a New Concept in Swedish Company Law. by : R. Skog
No.399	June 1993	Big Changes in Swedish Education. by : K. Weyler
No.400	October 1993	Sweden's Rocky Road to EC Membership. by : M. Hallgren
No.401	December 1993	The Natural Step－a Social Invention for the Environment. by : R. Eronn
No.402	March 1994	New Rights for Persons with Functional Impairments. by : M. Sjoberg

第三種郵便物認可 昭和44年12月23日 スウェーデン社会研究月報 平成6年5月25日 第26巻 第5号 通算286号 毎月1回25日発行 編集責任者 岡沢憲芙 発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 定価三〇〇円